TOP MUSEUM

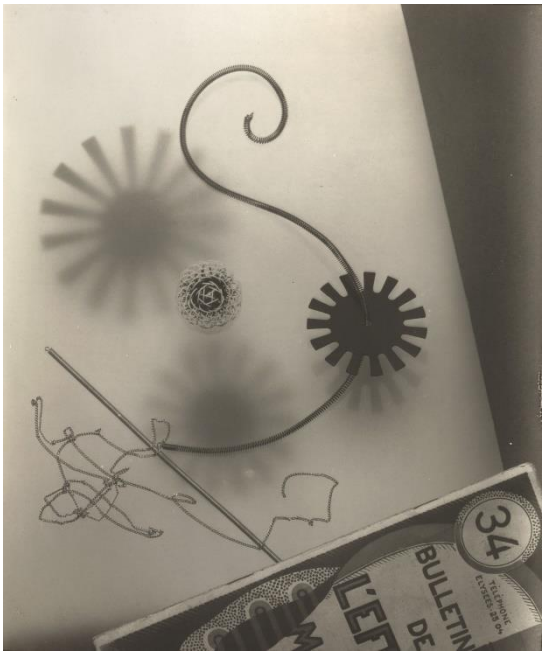
東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
TEL 03-3280-0099　FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

『光画』と新興写真　モダニズムの日本

The Magazine and the New Photography: *Koga* and Japanese Modernism

2018 年 3 月 6 日（火）～5 月 6 日（日）



左）木村専一　〈フォトアウゲ〉より　1931 年
右）中山岩太　《‥‥》1932 年
　　中山岩太の会（兵庫県立美術館寄託）

かうした作品も藝術ではないだらうか？
『新興写真研究1』（1930年）より

展覧会概要

本展は 1930 年前後に日本の写真史において盛んとなっていた新興写真に注目した展覧会です。新興写真とは、ドイツの新即物主義（ノイエザッハリヒカイト）やシュルレアリスムなどの影響をうけ、それまでのピクトリアリズム（絵画主義写真）とは異なり、カメラやレンズによる機械性を生かし、写真でしかできないような表現をめざした動向です。

『光画』とは 1932 年から 1933 年までわずか 2 年足らずしか発行されなかった写真同人雑誌です。主宰者である野島康三、同人であった木村伊兵衛、中山岩太を中心に関西（浪華写真倶楽部、芦屋カメラクラブなど）のアマチュア写真家をも巻き込み、新興写真を牽引しました。ジョン･ハートフィールド、エドワード・スタイケン、ウジェーヌ・アジェなど外国人作家の作品紹介から、フランツ・ロー、ラースロー・モホイ＝ナジの論文の翻訳など、海外の情報も掲載し、第 2 号から同人として参加した、評論家の伊奈信男が創刊号に掲載した「写真に帰れ」は、日本近代写真史を代表する論文として知られています。

また 1930 年には雑誌『フォトタイムス』の編集主幹であった木村専一を中心に「新興写真研究会」が結成され、堀野正雄、渡辺義雄などが参加しています。わずか 3 号ですがこの研究会の雑誌も発行されました。今回はこの二つの雑誌に掲載された写真を中心に、新興写真に影響を与えた海外写真家の作品とその後の写真表現を展観いたします。

日本では戦後の主流となったリアリズム写真表現と相反する部分も多かったために、注目される機会が限られていました。しかしさまざまな実験や工夫があり、その後の広告表現やリアリズム写真にも影響を与えています。幅広い豊かな写真表現をご堪能下さい。

出品作家

野島康三、中山岩太、木村伊兵衛、ハナヤ勘兵衛、佐久間兵衛、堀野正雄、吉川富三、安井仲治、大束元、錦古里孝治、岡野一、堀不佐夫、高麗清治、ラースロー・モホイ=ナジ、ウンボ ほか

主な出品作品

本展では 1930 年代前半～後半の、戦争の足音が刻々と近づいてくる時代に、センセーショナルに登場した新しい写真の表現を、つまびらかにご紹介します。

作品点数 147 点、資料 11 点 （作品番号 2-95 と資料『初夏神経』は同一です）

展示構成

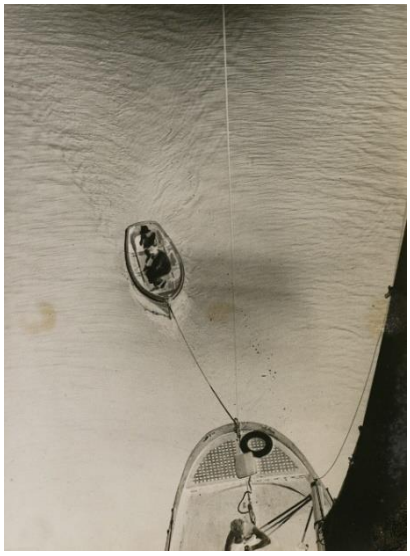
－第 1 章－ 同時代の海外の動き

独逸国際移動写真展 より

～ドイツの写真展が、日本にやってきた！～

プリント 4 点（No.1-1～No.1-4）、資料展示

独逸国際移動写真展は、1931（昭和 6）年に東京と大阪で開催された写真展です。1929 年にドイツのシュトゥットガルトなどで開催された「Film & Foto」展の写真部門だけを巡回したもので、村山知義（小説家・画家）と山内光（本名：岡田桑三、俳優・映画プロデューサー）が日本に紹介しました。展覧会カタログとされる『foto-auge（フォトアウゲ）』と、掲載作品よりプリント 4 点を紹介します。



左）ラースロー・モホイ=ナジ
《ボート》 1927 年
右）ヴァルター・ フンカート
《ガラス玉》 1929 年

木村専一コレクションより

～日本の作家に影響を与えた、海外名作の数々～

プリント 19 点（No.1-5～No.1-23）、資料展示

日本の新興写真に影響を与えた海外作品として、雑誌『フォトタイムス』（オリエンタル写真工業発行、1924-41 年）編集主幹であった木村専一が、1931-32 年にヨーロッパとアメリカで手に入れた作品を紹介します。

木村専一コレクションとは？

当館の開館準備時期に、木村専一の子息・正氏より購入と寄贈をうけた作品のことで、現在、127 点を収蔵している。この中には欧米の著名な写真家である、マン・レイ、ラースロー・モホイ=ナジなども含まれている。当館の貴重なコレクションとして、展示されてきた作品も多いが、数人の作品については作家情報が不明であった。2014-16 年のリニューアル休館中の調査により、多くの情報が明らかになっている。日本の写真界がどのような形で、欧米の写真から影響をうけ、受容されていったのかを理解するうえで重要なコレクションである。

1

2

3

4

1）ウンボ　題不詳　1929 年頃
2）リー・ミラー　題不詳　1931 年
3）イヴァ　題不詳　1930 年頃
4）リー・ミラー　題不詳　1931 年頃

木村専一（1900-1938）　（写真家／写真誌編集者）

1923 年	オリエンタル写真工業に入社
1924 年	写真雑誌『フォトタイムス』創刊。編集主幹となる
1929 年	5 月号から新コーナー「モダーン・フォトセクション」で欧米の写真動向を紹介
1931-32 年	山田英吉（生没年不詳）、中山正一（1891-1950）、安本江陽（1889-1944）と渡欧・渡米
1931 年	2 月号から「欧米視察旅行記」を『フォトタイムス』にて全 28 回連載
1933 年	オリエンタル写真工業退社
1934 年	10 月に武蔵野写真学校設立
1938 年	38 歳で早世

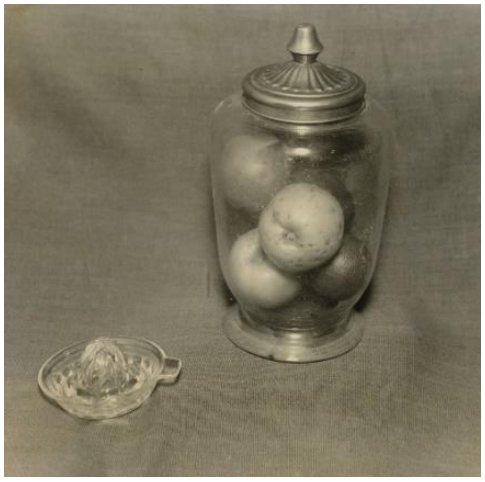
－第２章－ 新興写真

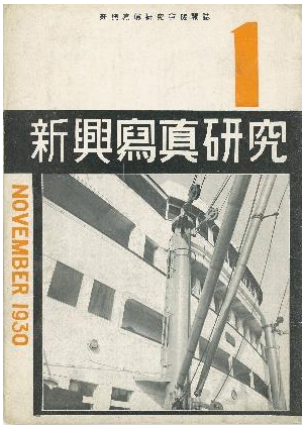
『新興写真研究』全３号 より

～わずか３号で終焉をむかえた、幻の写真誌～

全点プロジェクション展示、プリント作品４点（No.2-1～No.2-4）、資料展示

新興写真研究会（会員数約 300 人）の機関誌『新興写真研究』（1930-31 年発行）は、1930 年 11 月から 3 号だけ発行され、発行部数も希少なことから、まさに幻の存在でした。本展では本年度、当館のコレクションとなった本誌の現物を展示するとともに、掲載されている 49 点の作品を全点プロジェクション展示します。現存する木村専一、古川成俊のプリント作品４点も紹介します。





左）木村専一〈フォトアウゲ〉より 1931 年
中）古川成俊 《モンターヂュ》 1931 年
右）『新興写真研究 1』 1930 年

『光画』全 18 号 より

～作品発表から海外情報まで、時代をリードした写真アート誌～

プリント作品 49 点（No.2-5 以降で写真網目銅凸版印刷ではないもの）

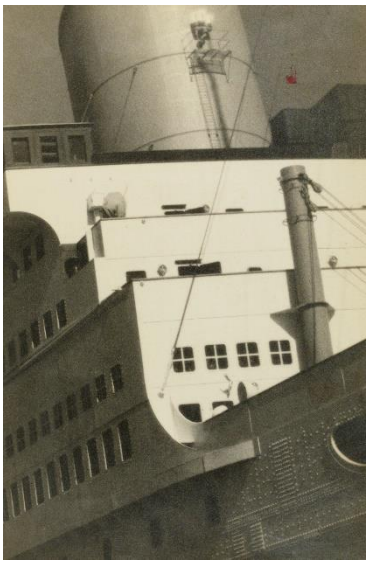
『光画』より 39 点（No.2 で写真網目銅凸版印刷と表記のあるもの。本誌の頁を額装）、資料展示

写真同人雑誌『光画』（全 18 号、1932-33 年発行）には、新興写真をリードした作品計 96 点が紹介されています。本展では、野島康三、木村伊兵衛、中山岩太の作品をはじめ、現存するプリント作品 49 点の展示や、美しくデザイン・印刷された表紙の展示などによって、『光画』の全貌に迫ります。

1

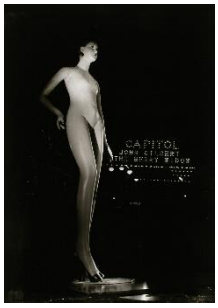
2

3



4

5



6

1)『光画』第一巻第一号　1932 年　聚楽社　2）佐久間兵衛　『光画』第二巻第三号 表紙 1933 年　3）佐久間兵衛《汽船》 1932 年　4）岡野一《顔》 1932 年　5）中山岩太《‥‥》 1933 年　6）佐久間兵衛《‥‥》 1932 年

－第 3 章－　新興写真のその後

1930 年代後半へ　広告／報道／前衛写真

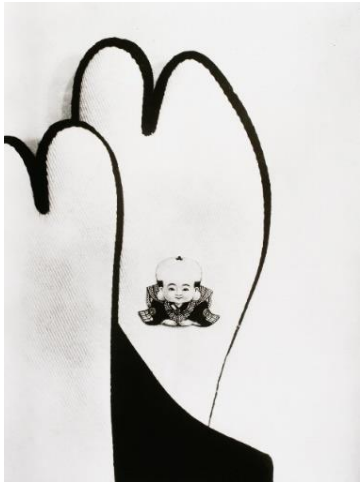
～しのびよる戦争、写真は新たな役割をになう～

プリント 28 点（No.3-1～No.3-28）、資料展示

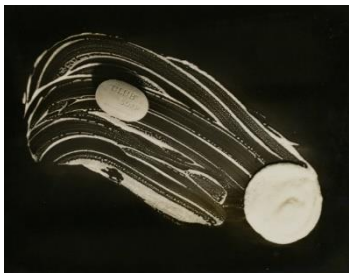
1930 年代後半になると、新興写真の表現は新たな広がりを見せていきます。広告に写真が使われ始めたのもこの頃です。日本人ならではのクリエイティブな感覚は、現代の私たちにも新鮮です。

『光画』の活動と平行して、伊奈信男や木村伊兵衛は、名取洋之助とともに日本工房を設立し、対外宣伝誌『NIPPON』を創刊します。伊奈、木村はのちに中央工房を設立し、東方社として対外宣伝誌『FRONT』を創刊します。写真は、戦中の国内外の宣伝活動を支えていきました。

前衛写真は新興写真の活動が急速に分散していくなかで、シュルレアリスムや抽象絵画の影響をうけ、関西の「浪華写真倶楽部」や中京の「ナゴヤ・フォト・アヴァンガルド」、東京の「前衛写真協会」などが中心となり、写真にさまざまな手を加えた実験的な作品をつくりだしていきました。



上）中山岩太　《福助足袋》 1930 年



左上）小石清　《クラブ石鹸》 1931 年
左下）木村伊兵衛　《奉天》〈瀋陽〉より 1940 年
右下）椎原治 題不詳 1938 年頃

展覧会図録

全出品作品の図版、当館学芸員および研究者のテキスト、さらに『新興写真研究』全巻を収録します。

書名　『光画』と新興写真　モダニズムの日本

執筆　谷口英理（国立新美術館　学芸課美術資料室長）、藤村里美（東京都写真美術館学芸員）

編者　東京都写真美術館

発行　国書刊行会　　3,672 円(税込)　A4 判変型、全 232 頁

関連イベント

トーク①　「新興写真とはなんだったのか」

2018 年 3 月 17 日（土）14:00〜16:00

パネラー　谷口英理（国立新美術館　学芸課美術資料室長）
松實輝彦（名古屋芸術大学准教授）
光田由里（美術評論家）

司　会　　藤村里美（東京都写真美術館学芸員）

定　員　　190 名（整理番号順入場／自由席）

会　場　　東京都写真美術館 1 階ホール

トーク②　「『光画』について」

2018 年 4 月 22 日（日）14:00〜15:30

講　師　　飯沢耕太郎（写真評論家）

定　員　　50 名（整理番号順入場／自由席）

会　場　　東京都写真美術館 1 階スタジオ

①　②とも入場無料／要入場整理券　＊当日 10 時より①1 階ホール／②1 階受付にて整理券を配布します。

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1、第3金曜日14:00より。展覧会チケット（当日消印）をご持参ください。

＊事業はやむを得ない事情で変更することがございます

開催概要

主　催　　東京都 東京都写真美術館／読売新聞社／美術館連絡協議会

協　賛　　ライオン／大日本印刷／損保ジャパン日本興亜／日本テレビ放送網

会　場　　東京都写真美術館 3 階展示室　東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内
Tel　03-3280-0099　URL　http://topmuseum.jp

開館時間　10:00〜18:00（木・金は 20:00 まで）入館は閉館 30 分前まで

休館日　　毎週月曜日　※ただし、4 月 30 日（月・振休）、5 月 1 日（火）は開館

観覧料　　一般 700 (560)円／学生 600(480)円／中高生・65 歳以上 500(400)円
※（　）は20名以上の団体料金 ※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料　※第3水曜日は65歳以上無料

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。
掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。
なお、掲載点数が 1 点の場合は、展覧会メインイメージとして、本リリース 1 ページ目の
木村専一　〈フォトアウゲ〉より　1931 年頃もしくは
中山岩太《‥‥》1932 年　中山岩太の会（兵庫県立美術館寄託）　をご提供させていただきます。
このリリースに掲載されている作品のうち、記載のないものは東京都写真美術館蔵です。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
図版のトリミングおよび文字載せはできません。

〒153-0062　東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内　東京都写真美術館
1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan
Tel　03-3280-0034　Fax 03-3280-0033　http://topmuseum.jp
展覧会担当　藤村里美 s.fujimura@topmusum.jp　関次和子 k.sekiji@topmuseum.jp
広 報 担 当　久代明子　平澤綾乃　前原貴子 press-info@topmuseum.jp

『光画』と新興写真　モダニズムの日本
展示パネル

第 1 章
同時代の海外の動き
新興写真に影響を与えた海外の写真が日本に紹介されたのは、1920 年代半ばに入ってからでした。当時、流行していたピクトリアリズム（絵画主義写真）に閉塞感を感じていた人々は、輸入された写真集や雑誌、展覧会などで展示された同時代の新しい表現に多大な影響を受けます。この章では 1929 年にドイツのシュトゥットガルトなどで開催された「映画と写真」展に関連して発行された写真集『写真眼』に掲載されている写真と、1931 年から木村専一らが欧米視察旅行で入手した写真を紹介します。

第 2 章
新興写真
新興写真とは、ドイツの新即物主義（ノイエザッハリヒカイト）やシュルレアリスムなどの影響をうけ、それまでのピクトリアリズム（絵画主義写真）とは異なり、カメラやレンズによる機械性を生かし、写真のみがなし得る表現をめざした動向です。この動きは 1920 年代後半から 1930 年代前半にかけて隆盛しました。
写真評論家の伊奈信男はこの新興写真について、以下の 3 種に分類しています。
1、対象を客観的に正確に把握し、新しい美を発見して表現すべきこと
2、生活の記録や人生の報告を行うものであるべきこと
3、光による造形としてフォトグラムやフォトモンタージュがあること
新興写真とはひとつのスタイルや目的をもつ運動ではなく、そこにはさまざまな表現手法が混在していました。

第 3 章
新興写真のその後
新興写真は、純粋な個人の芸術表現と、社会的ツールとして有用性を高めていく方向性へと次第に分化を始めました。
芸術表現としての写真は、次第にシュルレアリスムや抽象主義と接近し、画家や詩人たちも巻き込んで、「前衛写真」と呼ばれるようになります。前衛写真を研究するグループとしては、1934 年に名古屋の坂田稔を中心として結成されたなごや・ふぉと・ぐるっぺ、37 年に浪華写真倶楽部の急進的なメンバーである花和銀吾を中心として結成されたアヴァンガルド・造影集団、38 年に瀧口修造を中心として発足した東京の前衛写真協会、39 年に福岡で吉崎一人らが結成したソシエテ・イルフなどがあげられます。
また一方で、新即物主義やバウハウスの運動のもとで生み出された実験的な手法による写真は、グラフィックデザインの素材として広く利用されグラフ雑誌の表紙や広告頁を飾るようになり、さらに日本の新興写真の動きの中で発展した報道写真は『NIPPON』や『FRONT』などの対外宣伝誌などにおいてプロパガンダの主たる材料として盛んに使用されるようになります。

＜解説＞

木村専一コレクション

雑誌『フォトタイムス』の編集主幹であった木村専一が、1931-32 年に山田英吉、中山正一、安本江陽とともに欧米視察旅行に赴き集めた写真。多くは実際に現地で写真家から直接入手しました。これらの作品はのちに『フォトタイムス』で連載されていた「モダーン・フォトセクション」欄などに掲載されました。

写真集『写真眼』

1929 年にドイツのシュトゥットガルトなどで開催された「映画と写真」展に関連して、フランツ・ローやヤン・チヒョルトによって編集・発行されました。日本でも村山知義と山内光（本名：岡田桑三）が朝日新聞に企画を持ち込み、この展覧会の写真部門だけが「独逸国際移動写真展」として 1931 年に東京（東京朝日新聞社本社展会場）と大阪（大阪朝日新聞社本社社屋）に巡回し、大きな反響を呼びました。

『新興写真研究』

木村専一を中心に立ち上がった新興写真研究会の機関誌として、1930 年 11 月から 1931 年 7 月まで全 3 号が発行されました。新興写真研究会は主幹の木村専一の勤務先でもあるオリエンタル写真工業の関係者が多かったのですが、そのほかにも関西の浪華写真倶楽部や名古屋の独立写真研究会に属する写真家なども参加していました。会員の作品のほか、堀野正雄、木村専一、板垣鷹穂らの論文やエッセイ、海外の作家の作品も掲載されていました。会員向けの非買品であったこと、3 号までに記された会員数を累計しても 80 人程度の会の機関誌であったため、実質発行部数はおそらく 200 部を少し超える位の数であったと思われます。

『光画』

野島康三、木村伊兵衛、中山岩太（2 号より伊奈信男）を同人として創刊された雑誌。1932 年から 1933 年にかけて全 18 号が発行されました。同人だけではなく、新興写真研究会にも所属していた堀野正雄や飯田幸次郎や、関西の浪華写真倶楽部の安井仲治や花和銀吾、芦屋カメラクラブのハナヤ勘兵衛などの写真家の作品も掲載しています。図版数は全 196（2 巻からの表紙写真を含む）点、掲載された写真家は約 70 人でした。記事としてジョン･ハートフィールド、エドワード・スタイケン、ウジェーヌ・アジェなど外国人作家の写真や、フランツ・ロー、ラースロー・モホイ＝ナジの論文の翻訳など海外の情報も掲載し、伊奈をはじめとして、清水光や原弘なども論文やエッセイを寄せています。創刊号に掲載された伊奈の「写真に帰れ」は、この時代を代表する重要な写真論として知られています。

『フォトタイムス』

1924 年に、オリエンタル写真工業から刊行。木村専一を編集主幹とし、29 年ころから「モダーン・フォトセクション」などのコーナーで欧米の新しい写真を積極的に紹介しました。1930 年代後半は「前衛写真研究会」、「青年報道写真研究会」を後援しています。41 年の写真雑誌統廃合により「報道写真」と改題しました。

『初夏神経』
1933 年に浪華写真倶楽部から刊行されました。1932 年 8 月に展示された浪華写真倶楽部による第 21 回浪展に出品された 10 点の連作によって構成されています。写真はモンタージュやフォトグラムなどの新しい写真技法をつかい、自作の詩も掲載されています。装丁デザインは誰がおこなったかは不明ですが、金属板の表紙にスチール製リングでスパイラル綴りがされています。

『FRONT』
1942 年から 1945 年までに 10 冊（刊行は 9 冊）が刊行された対外宣伝のためのグラフ雑誌。内閣情報部の後押しにより東方社より発行されました。日本の国威、軍事力などを誇示する内容であり、目的によって翻訳される言語数が異なっていました。デザインは原弘、多川精一らが、写真は木村伊兵衛、渡辺義雄、菊池俊吉、濱谷浩などが担当しました。

『NIPPON』
1934 年から 1944 年まで 36 号まで刊行された、日本文化を紹介するための対外宣伝のためのグラフ雑誌。当初、鐘紡紡績社が出資しましたが、のちに国際文化振興会の援助を受け、名取洋之助が率いる日本工房が制作しました。デザインは山名文夫、河野鷹思、亀倉雄策らが、写真は名取、土門拳、藤本四八らが担当しました。

『写真週報』
1938 年から 1945 年まで出版された週間の国策用グラフ雑誌。官報販売所や書店などでも販売され、約 20 万部発行されました。内閣情報部（のちの内閣情報局）によって刊行されたために、デザインなどは誰が担当していたかは明らかではありません。写真は木村伊兵衛、小石清、土門拳などが担当しましたが、公募により一般読者の写真も掲載されました。